

色づいた紅葉も過ぎ去っていき、落ち葉が飾る庭には眠るような静けさが満ちていた。

最近少し、寒さに弱くなった気がする。

診察室の小さな暖炉に薪を入れるため、手に取った、その瞬間だった。

「ルル！」

扉が勢いよく開いて、ツバメが飛び込んでくる。

「今、フォルの母親が来て、熱が三日もさがらないらしいんだ。俺たちが作った薬を飲んでも、すぐにあがってしまうみたい」

「そんな……」

子どもの熱が三日も続くのは、危険な状態だ。

焦りが胸の奥からじわじわと湧きあがってくる。

「またうちで預かる？ それなら俺、今すぐ行くけど」

「とにかくフォルの家で様子を見て、薬をいくつか用意して……」

「ルル？」

「いえ、材料だけ持って行って、でも、本当にそれだけでいいの？ やっぱり、もう……」

「ルル！」

「……え？」

ツバメに強く肩をつかまれて、ようやく呼びかけられていることに気がついた。

「落ち着いて」

「ごめんなさい。私……」

「気持ちはわかるよ。でも、一旦深呼吸しよう。ね？ 吸ってー」

「ええ？」

「早く」

戸惑いながらもツバメに促されるまま、大きく息を吸い込む。

「吐いてー」

「……ふう」

あたたかい空気が肺を満たし、胸が少しだけ軽くなる。

「ほら、大丈夫」

「ありがとう、ツバメ」

「どういたしまして。じゃあどうする？」

「フォルを連れてきてくれるかしら。また、うちで診るわ」

「わかった」

彼はうなずいて、すぐに出ていった。

フォルの家は近いから、それほど時間はかからないだろう。

調薬室へ向かい、^{くすりだな}薬棚を確認する。

そのとき指先が少しだけ震えていることに気がついて、寒さのせいだと思った。

冷たい指先をこすりながら、薬草の状態をひとつずつ確かめていく。
フォルを助けたい。

この子はこれからたくさん、いろんなことに触れていくはずなのに。
——薬草は、誰かのためにある。

秋の日、ツバメがそう言っていた。

私は考える全ての薬を持ち出して、診察室で彼らの到着を待った。

「おまたせ」

「ありがとう。お母さんは？」

「看病でほとんど眠っていないらしいから、ゆっくり休むように伝えてきたよ」

「そう……」

ベッドに寝かされたフォルの頬は真っ赤で、体もぐったりとしている。

見るからに状態が良くない。

悪い予感が働いて、彼の手首に指をあてた。

脈拍が弱すぎる。

今から薬を作っている時間は、ない。

わかってる、でも——。

「このままじゃ、フォルが……」

「俺はどうすればいい？」

「……ツバメは、出ていって」

「どうして？ 手伝うよ」

「いいから、早く——！」

もんどう
問答する時間すら惜しい。

こうしている間にも、フォルの^{ともしび}灯火が消えかかろうとしている。

こんなとき、父ならどうしただろう——。

まだそんなことを考えてしまう私は、頭を振る。

目の前で燃え尽きそうな命がある、それが、全てだった。

私はいよいよ、薄く発光するガラス瓶を手にとった。

「それって……」

「とにかく今から見ることは、内緒にしてほしいの」

迷っている暇は、もうない。

瓶の蓋^{ふた}をはずし、フォルに薬を流し込む。

数分後――。

頬の赤色が引いていく。

苦しそうにゆがめられていた表情が、少しずつ落ち着いていく。

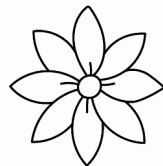
「……熱が、下がった？」

「……そう、ね」

「ルル、今のって……」

「これは……、万能薬なの」

私は空になったガラス瓶を見つめた。



「母親に報告しに行きましょう。フォルを、お願い」

「……わかった」

フォルを家へ送り届ける間、会話はなかった。



フォルの母親に容態が安定したことを伝えると、彼女は泣き崩れながら何度もお礼を口にした。

「もう大丈夫。きっと、もう。平気よ」

そう伝えて、薬屋へ戻る。

けれど――家についたその瞬間。



「ルル？」

視界が、ゆっくりと霞んでいく、足元の感覚が崩れる。

「どうしたの？」

ツバメの声が聞こえて、足音が近づいてくる。

「大丈夫？」

音も、光も、遠ざかっていく気がした。
彼の腕に支えられた感覚だけを残して、私は、静かに意識を手放した。